

第16回 都民公開講座

いのちをつなぐチームワークを!

# 救急医療のかかり方

家族や自分が病気やケガをしたとき「とっさにどうしたら良いかわからずに慌てた」「救急車を呼ぶべきか迷った」という経験はありませんか。東京都では近年、特に高齢者や軽症者への救急利用が増加しています。11月5日に東京都医師会館で行われた都民公開講座では、誰もが安心して救急医療を受診できるよう、これからの救急医療のあり方について、参加者とともに考えました。

主催：公益社団法人 東京都医師会 後援：東京都、朝日新聞社



2017年11月5日開催

紙上採録

会場：東京都医師会館



●主催者あいさつ  
東京都医師会 会長 尾崎治夫



東京都医師会の都民公開講座は、おかげさまで16回目を迎えることができました。東京都では、高齢化にともない近年救急車の利用が増加しています。昨年は過去最高の77万件を超える出動がありました。これは約40秒に1度救急車が呼ばれているという計算になります。2025年には、約800万人いる団塊の世代の方々が75歳以上の後期高齢者となり、必要に迫られる救急医療を受けられる体制を整えるために、ご参加いただいているみなさまとともに、考えていきたいと思っています。

基調講演

みなんで育てる救急医療  
日本医科大学大学院医学研究科 救急医学分野教授  
同付属病院高度救命救急センター長  
一般社団法人日本救急医学会代表理事  
横田裕行氏



私は17年前に心臓疾患で倒れました。打ち合わせをしていたら突然味わったことのない悪寒がし、内臓をわしづかみされたような感じになりました。脂汗が流れ、打ち合わせどころではなくなつてホテルへと戻りました。寝ている間も汗が引かず、妻が水やスポーツドリンクを飲ませてくれました。あとで先生に聞くと、妻のこの処置で助かったことでした。翌日クリニックに行くと、ちょうど循環器内科の若い先生がアルバイトで来ていました。症状を話すと、もしかしたら心臓の異常かも」とすぐに心電図をとりました。すると心電図の折れ線グラフはバラバラで、「これは、心筋梗塞かもしれない、大変な状態です」と言われました。救命に携わる方々は、毎日が命と向き合う生放送のような大変な現場だと思っています。私も実際にお世話になることで、改めてその大変さがありがたさを感じました。まずは自分の健康をしっかり管理すること、そして非常事態の時には何をすればいいかということを一入ひとりしっかりと考え、身につけることが大切なのだと思っています。「みなさまの、安心立命にスミイン！」

「救急医療を「育てる」とは、ピンとこないかもしれません。しかし社会インフラとして質の高い救急医療を受けられるようにするためには、救急医療の現場を知り、育て、進化させていく必要があります。日本の救急医療は「いつでもどこでも誰にも」受けられて質が高い。これは私たちの財産なので、未来へと積み上げていかなければなりません。現在、救急車の要請件数は全国で年間600万件を超えています。

東京都では80万件に迫っており、肩が重いです。万、受け手側の医療機関は、バブル期を境に減少しています。そのため、救急車を呼んでから救急隊が到着するまでの時間、病院までの搬送時間が少しずつ長くなっています。極端な例では、突然の心臓停止が起きた場合、何の処置もしないと救命率は1分ごとに7%、10%低下します。救急車が来るまでの時間は全国平均で9分ほどなので、何もしないと救命率はほぼ0になる計算です。

突然の心臓停止でも、心臓が原因の場合はその場に誰かがいた時は、約13%の人が助かります。おそろしくすぐに119番をし、約半数の人が応急手当までを行うからでしょう。AEDを使って処置すれば救命率は54%となり、半数以上の人が助かるのです。救急車が来るまでの時間が長くなると、日本の救命率は上がっており、医学の進歩とともに、「一般の人の手当てのおかげでもあり、誇るべきデータです。」

もう一つ、救急の現状では77万件あまりコールされる119番ですが、実際に搬送しているのは69万人という数字があります。救急車を呼んだだけで乗るほどではなかった、あるいはいたずらに話し相手欲しくて救急車を呼ぶケースなどもあるようです。こうした現状は、救急医療を育てる上で検討すべき事項でしょう。必要な時に必要な人が救急医療を受けられるように、119番は正しく使ってほしいと思います。救急車を呼ぶべきか迷った際にはぜひ、東京消防庁の救急相談センター「#7119」を使ってみてください。

町 町さんのお話を伺って、これから在宅の看護や介護が進む中で、みどりや終末期に関する「尊厳を保つ体制」はとても大切だと感じました。それを受けて、私からは消防庁の立場から「けがの予防」「事前の備え」そして「#7119」についてお伝えしたいと思います。先ほどから救急の要請が増加しているというお話が続いていますが、救急車を呼ぶのを減らすということではなく、救急車を呼ぶような事故に遭わないための心掛けを持ってほしいです。

新井 先ほど、救急搬送の件数が80万件に迫るとの話がありましたが、小児の救急搬送の事例は、その

講演

突然の病による救急体験  
私の命をつないでくれたチームリレー  
フリーアナウンサー 徳光和夫氏

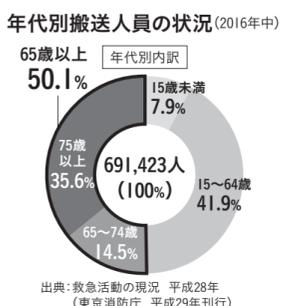
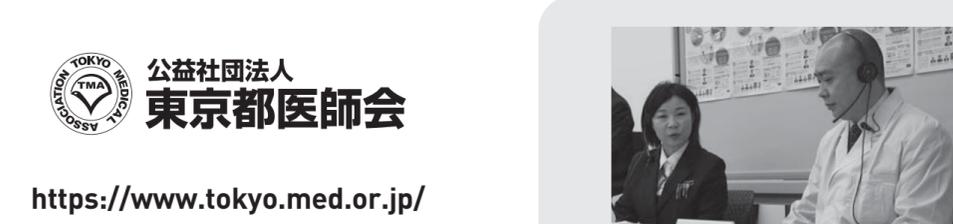
「救急車を呼んでくれたので、大学病院に担ぎ込まれると、ちょうど私と同じような症状の人のカテーテル手術が終わったところでした。そこでそのチームがそのまま私のカテーテル手術もしてくれました。循環器内科の先生が心筋梗塞を疑ってくれたこと、救急隊員の迅速な搬送、病院での手術そのものが欠けても今の私はなかつたわけです。だから、助かったではなく、助けられた、生きているではなく、生かされているという意識を持つようになりました。」

町 私はくも膜下出血で、右半身まひと言語障害のある母を10年間介護してきました。その母に子宮頸がんが見つかったのですが、見つかった時はすでに転移もあつて手術もできない状態でした。そこで、緩和ケアをして、毎日来てくれる訪問看護を利用することで、母を在宅で介護し、みとることができました。大切な人が終末期、治らない病気がたつた時は、誰もが「何かあつたらどうするんだ」と不安な気持ちになり、信頼できる人ときちんとコミュニケーションをとることで、その不安は少しは拭えるのではないかと考えています。

森住 町さんのお話を伺って、これから在宅の看護や介護が進む中で、みどりや終末期に関する「尊厳を保つ体制」はとても大切だと感じました。それを受けて、私からは消防庁の立場から「けがの予防」「事前の備え」そして「#7119」についてお伝えしたいと思います。先ほどから救急の要請が増加しているというお話が続いていますが、救急車を呼ぶのを減らすということではなく、救急車を呼ぶような事故に遭わないための心掛けを持ってほしいです。

新井 先ほど、救急搬送の件数が80万件に迫るとの話がありましたが、小児の救急搬送の事例は、その

町 町さんのお話を伺って、これから在宅の看護や介護が進む中で、みどりや終末期に関する「尊厳を保つ体制」はとても大切だと感じました。それを受けて、私からは消防庁の立場から「けがの予防」「事前の備え」そして「#7119」についてお伝えしたいと思います。先ほどから救急の要請が増加しているというお話が続いていますが、救急車を呼ぶのを減らすということではなく、救急車を呼ぶような事故に遭わないための心掛けを持ってほしいです。



パネルディスカッション

救命救急医療・サポートへのとりくみ  
地域や都民と  
いかに協力していくか

- パネリスト
- 東京消防庁 救急部長 森住敏光氏
  - 株式会社キャリアアム代表取締役 株式会社救急受診ガイド 町 香苗氏
  - フリーアナウンサー(全日本会兼任) 猪口正孝氏
  - 東京都医師会副会長 猪口正孝氏
  - 東京都医師会理事 新井 悟氏

猪口 本日のテーマ「いのちをつなぐチームワークを! 救急医療のかかり方」ですが、パネルディスカッションでは、都民の目線と体験から見える課題や消防庁、医療者の立場から、それぞれの現状や課題を話し合っていきたいと思います。

猪口 「#7119」では高齢者と子どもの相談が多いのですが、働くママの立場からの声をお聞かせください。

猪口 「#7119」では高齢者と子どもの相談が多いのですが、働くママの立場からの声をお聞かせください。

「#7119 デモンストレーション」

家族や自分が急な病気やケガをした際、救急車を呼ぶべきか迷った際に24時間体制で相談できる「#7119」では、医療機関の紹介と救急相談を受け付けています。実際にダイヤルすると自動音声で、「医療機関を探さか「救急相談」かを案内され、番号を選ぶと医療機関案内の通信員、救急相談の看護師、アドバイスをする救急相談医などの専門家に相談することができます。都民公開講座の会場では、パネリストの堤香苗さんがお母さん役となり、実際に相談窓口で相談を受けている救急看護師とリアルなやり取りを交わすデモンストレーションが行われた。

病院へ行く? 救急車を呼ぶ? 迷ったら...  
電話でも! ネットでも!

**#7119**

電話で相談 / ネットでガイド

東京消防庁救急相談センター / 東京都救急受診ガイド

#7119 電話 / #7119 検索

東京消防庁 東京都医師会 東京都福祉保健局